

欧州社会主義の現実

防衛大学校教授
佐瀬昌盛



■「冬の時代」に政権奪取に向け模索

ドイツ総選挙でコール首相が敗れ、シュレーダー社民党を中心に「赤と緑」の連立政権になった。日本のマスコミではわかに「欧州に社民主義の時代きたる」「中道左派のEU」という報道のしかたが始まった。ヨーロッパではEU15カ国のうちの13カ国で、何らかの社会民主主義、民主的社会主義、あるいは共産主義から改宗した政党・勢力が政府に参加し、主として首班を立てている。この4、5年で、次々に中道左派が政権を担当するようになった。注目を浴びだしたのは「オリーブの木」を名乗った96年のイタリア・プロディ政権の成立だ。そしてこの二年で英国ではブレア党首率いる労働党が18年ぶりに保守党から政権を奪回。次いでフランスのシラク大統領の下でジョスパン社会党が総選挙に勝って内閣を組織した。

80年代はフランスのミッテランを除き、レーガン、サッチャーなど保守主義者が保守革命を目指して元気のよかった時代だ。日本の中曽根首相もある種の保守革命を目指した人だ。一方で社民あるいは左派勢力は「冬の時代」となり、わが国のジャーナリズムも全く関心を示さなかった。しかしその時代、どの国も左派勢力は政権奪取のために何をやるのかを模索していたのである。大事なのは、社会民主主義政党ないし民主的社会主義の政党が、冬の時代に何をやってきたかということだ。

わが国の社会民主主義勢力は、それなりに議席を持っていた70～80年代に、当時の言葉で言えば「革新とは何か」という議論をせず、自己革新を成し得なかった。かつて日本でも社会主義インター志向が非常に強かったが、ヨーロッパの社民主義政党中心だった社会主義インターは70年代、80年代、世界的に加盟国を拡大した結果、焦点がボケてきた。今日ではヨーロッパの社会民主主義勢力や社会民主主義者たちは、EUの中の欧州議会のなかで政党系列別に議席を置いている。そこでの交流が密接化して、社会主義インターはかつてのエネルギーを失いつつある。

■EU主要三政権それぞれの立場

このようにEUを構成する社民勢力は非常に緊密に提携しているかに見える。議員レベルではともかく、政権レベルでは必ずしもそうとは言えない。基本的な政治信条が同一でも、指導者同士のケミストリー(相性)が合うかは全くの別問題だ。特にこの主要三政権については、肌合いの違い、了見の違い、背景の違いが存在する。

ブレアは「第三の道」路線について『「第三の道」とは現代的な社会民主主義を刷新と成功に導く道筋である—中略—古い左と新しい右は、欧州でさまざまな形態をとってきた。第三の道にも唯一の青写真があるわけではない』(10月1日付『朝日新聞』)と言っている。つまり欧州各国は、具体的にはそれぞれ独自の道を歩むと言っている。

ブレアは保守革命で成し遂げたことを引き継ごうとして

いる。実際イギリス労働党はブレアにいたって、ついに二つのものと訣別した。一つは労働党が1918年につくり、これを撤廃しようと多くの労働党首が挑んでは挫折してきた党綱領第4項「生産と財の交流・交換の手段の公的所有」(国有化条項)、もう一点は「再分配主義」だ。再分配主義には「豊かであることは手直しすべき」という考え方がある。ブレアの社会主義はそれを否定し、自由競争の結果を概ねよしとする。

フランスのジョスパン社会党は依然所得再分配主義だ。政党と労組の系列もそれぞれオーバーラップしている。その中でフランスの社会主義は、国権主義的、あるいは法規制主義的だと言える。今日のフランスの社会党政権は、市場主義に法的規制を加えようとする。最低賃金制の強化はその典型的な例だ。これは規制緩和とは逆行する側面を持つ政権だ。

ドイツのコール政権は、レーガン、サッチャー、中曽根などが保守革命を目指した中、保守革命を目指さず「自由経済を旨とする市場経済を基本的に是認する。ただし市場経済が生み出す冷酷な結果にのみ配慮を行う」というドイツ独特の社会的市場経済を続けた。しかし社会的配慮がコール政権の保守16年の間に非常に手厚くなった。保守政権の下で肥大化した被用者の既得権にどのようにメスを入れられるかがいまのシュレーダー政権の直面する問題だ。ブレア政権とは基本哲学においては非常に近いかもしれないが、置かれている環境が全く逆だ。

■「社会的公正」への道は千差万別

ドイツはこれまでEU予算もほとんど言いなりに出し、そのペイ・バックも非常に少なかったため、コールは純コントリビューション(貢献度)の幅を下げる闘争に入り、シュレーダー政権もこれを継続する。その面で大きく戻してもらっていた国がフランスとイギリスだ。このようにEU主要三カ国を見ただけでも、恐ろしいほどの違いだ。対外的には一致結束の姿勢をとるだろうが、おそらく内部ではすさまじい国益の競争が始まる。英仏がドイツにもっと出し続けさせようとするれば、ドイツもそうはいかない。一方英仏も国内的には法規制主義と自由競争で全く違う。したがって三国の中道左派政権のスタンスは全部違う。

今日社会主義とは、「社会的公正」という言葉に表される。これを実現する上で、彼らの目標は、国家の枠組みの中で国民の社会的公正を実現するところにあるはずだ。したがって「社会的公正」にモデルはない。そのための道は千差万別であり、それが現実にはEUという枠組みの中で壮絶な国益の争いになって行くだろう。

11月6日 月例研究会より(要旨)